

〈近代本論第二十回：勝海舟と名奉行の系譜〉

参考文献

※『氷川清話』角川文庫（初版は1898年）

※『海舟座談』岩波文庫（初版は『海舟余波』として1898年、再版は『海舟座談』として1930年）

勝海舟（一八二三～一八九九）の伝記史料は、聞き書き集としての『氷川清話』（一八九八年）と『海舟余波』（一八九九年）が基本となる。『海舟余波』は後に編者巖本善治自身によって再編され、『海舟座談』として昭和五年（一九三〇年）に再版された。このころは明治時代への回顧が大きな波となって出版界を賑わしていた時代であるから（東京日日新聞の『戊申物語』シリーズなど）、巖本の再版もその流れに乗ったものだろうと推測される。したがって勝プロパーへの関心は、やはり明治末年の政治状況、国際状況と不可分であり、それは一言で言って日清から日露への過渡期と連動していることがわかる。それは、産業革命の第一次の波が都市と農村の環境を大きく変え始めた時期であり、そして日本最初の近代産業の公害、足尾銅山事件が深刻化していく時期でもあった（『海舟座談』には事件と正造への同情的なコメントが見られる）。

二つの聞き書きは、もちろん自伝とはちがうから、編者、対話者の主観がある程度混入することは避けがたい。しかし勝自身の肉声のオリジナリティは、そうした懸念を吹き飛ばすほどのものであるから、一応ここではすべてを原典史料として扱うことにする。特にイデオロギーとエトスの形成にかかわる根幹の部分、これから観察、解析していくわけなので、肉声の調子が真実であると判断されれば、それほど大きくは〈改竄〉、あるいは編者、対話者の主観の混入を気にする必要はないと思う。

一言、肉声の史料的信憑性について言っておけば、かつて江戸時代の編纂、あるいは場合によっては創作とまでされることの多かった、戦国時代の第一級史料、『甲陽軍艦』は、わたしは日本的専制の系譜を調べる仕事の関係でずいぶん前に閲覧したことがあり、読み始めてすぐに、真正の第一次史料であることを確信した。それは肉声のあとが生々しく反映されていたからである。語彙、シンタクス、事実性、すべてがその方向を指し示していた。その後、この史料の評価も徐々に変わってきているようだが、それは正しい方向だと思う。

これは一つの例だが、やはり肉声というものは人格の表徴であり、聞く耳さえあればそれほど「なりすまし」やためにする改竄を気にする必要はない。したがって、勝のこの二つの聞き書きも、貴重なオリジナル史料として大切にしていきたいと思う。近代史の史料

批判は、行きすぎると水も赤子にもなるし、別の比喻を用いれば、本物のタマネギ、〈歴史の真実〉という名のタマネギに至ろうとして、皮をむきつづけるサルようになる。もし改竄や改作があきらかになってくれば、それは改竄、改作の史料であるから、そのぺろっとむけた怪しげな皮だけを見て、どうしてそういう歪曲が行われたのかを個々に研究すればそれで済むことだと思う。こうした傾向は、日本近代では『太平記』をめぐる最初に起きたことだが、それもまた相当に狭い見識ではなかったかと『太平記』のファンの（史料としてのファンの）わたしは感じている。一度まとめて論じておいてもよいテーマかもしれないが、今はここまでとする。

勝の二つの聞き書きにもどるならば、その時期に維新のみならず、勝個人への関心が大きくなってきたことには、〈幕臣〉への関心一般があり、それはやはり藩閥官僚に対するアンチテーゼのような側面を持っていたのかもしれない。そしてその国民的関心は、直感的ではあるが、維新革命のある種のゆがみを正しく認識し始めたことが、背景にあるのではないかと思う。それは一言で言って、幕藩的官僚の末端部、あるいは中核部に散発的に頭れる強権のマニア（三島通庸、品川弥二郎を代表とする）に対する、民衆的な、そして国民的な強い忌避、嫌悪を背景にしていたように感じる。

もともと〈幕臣〉の伝統の中には、〈名奉行〉という、もっとも民衆にアピールするカリスマの伝説的描像があり（大岡越前から始まり、鬼平、遠山の金さんへと継がれていく、江戸大衆文学の系譜）、勝はその伝統の最後の体現者のような一面が確実にある。これもまた昭和期の勝ブームを呼んだのではないかと感じるのである（この時期、武士的情念への共感がすでに国民文化となっていたことは、上に述べた）。もちろん幕臣としての勝は、軍事を統括する陸軍総裁にまで上り詰めた大官だったが、その出世の最初は長崎奉行であり、後に海軍総裁にあたる軍艦奉行へと進む。旗本出自で奉行だった、遠山景元（遠山の金さん）の実父も、長崎奉行として活躍しており、やはり一つの系譜性を認めてよいと思う。つまり、旗本（中から下層）出自、奉行、そして下情を知る庶民派ということで、これが勝の場合には肉声そのものに投影されており、それが巖本たちの世代に不思議な安らぎと懐かしさのようなものを与えたのではないかと感じる。幕臣の勝と藩閥政治はもちろん明治における、表と裏であり、二本柱というよりは、勝ち誇る近代と、消え去る封建のような分類をされがちである。しかしこの民衆的心性における、〈名奉行〉の待望こそ、勝ブームを越えて、明治近代国家における大きな欠落、藩閥的官僚における民本的為政の感性の根本的な欠如を照らし出すものではないかと思う。その観点から、勝という定位ペルソナの全体を改めて捉え直してみたいのである。

彼のペルソナの造型そのものは、冒頭で述べた〈一身二生〉の型に収まっている。ただし、封建から近代への転生は、彼の場合は不思議に早く行われ、したがって定位の核心部での衝撃を生まなかった。少なくとも大きな分裂は生まなかったことが特徴的である。そのイデオロギー核は、尊皇でも佐幕でも、開国でも攘夷でもなく、彼が後に〈国家主義〉と呼ぶものであることはすでに見た。おそらく蘭学の修得過程、彼がああ豪商渋田利右衛門の援助を受けながら（第二章第一節）、大部のゾーフ・ハルマを二部筆写していたころにまで遡ると思う。それは具体的なドキュメントにはほとんど反映されていないことも特徴的である（聞き書きも〈国家主義〉の完成形のみが示され、その形成過程については沈

黙している)。それともう一つ、彼のペルソナの中核部にあるエートスは、私人としてのそれも、公人としてのそれも、これも非常に早く形成されている。つまりそれはまず剣と禅であり、本人の自覚では学問は後発的で、自分は剣で生きてきたという自覚を遅くまで持っていたようである。

〈本当に修行したのは、剣術ばかりだ。全体、おれの家が（※男谷の本家を指す）^{おたに} 剣術の家筋だから、おれのおやじも、骨折って修行させようと思って、当時剣術の指南をしていた島田虎之助という人について。この人は世間なみの撃剣家とは違うところがあって、始終、「いまどきみながりおる剣術は、型ばかりだ。せっかくのことに、足下は真正^{ほんとう}の剣術をやりなさい」といっていた。〉（『氷川清話』〈本当にしたのは剣術修行〉、209p）

前節で概観したように、〈天保の三剣豪〉の一人である島田は、古いタイプの剣士であり、また新しい〈幕末道場〉の運動の先駆者の一人でもある。その古い面は、彼の禅学の素養（儒学も修めたらしい）にあらわれ、それを彼はすでに九州で遍歴を始める前に修得している。当時の剣道の稽古はおおむね型のみであり、他流（道場破りを含む）を禁じていた。これを破ったのが海舟の父小吉であり、また男谷信友だった。男谷は他流を許したばかりでなく、竹刀での試合を奨励したことで知られる。これが幕末にハブとして機能する道場の祖型となるわけだが、同じく個人道場を持った島田は、やや古い〈精神修養としての剣（剣禅一如）〉を本道と見ていたことがわかる。若い勝も島田に勧められて参禅を繰り返している。勝はしたがって、この古いタイプの剣道でおのれを磨くのに専念した結果、木戸たちが体験した道場を通じての広い交際は、ほとんど行わずに終わった。しかし彼の剣が、ネットワーク形成と無縁だったかということ、そうではない。そこがとても面白いので少し観察しておこう。

まず精神修養は大いに役立った。

〈修行の効は瓦解（※維新のこと、幕臣風の用語を用いている）の前後にあらわれて、あんな艱難辛苦に耐ええて、少しもひるまなかつた。〉（同上）

これは有名な話だが、かなりの使い手だったはずの勝は、人を斬るのが厭で、維新の動乱期は、刀の鑿をこよりで結んでわざと刀が抜けないようにしていた（『海舟座談』）。面白いのだが、小吉もあんなに暴れん坊で、喧嘩がそれこそ「飯より好き」だったわりには、人を殺したことも斬ったこともない。そしてそれを自慢している（『夢酔独言』）。これもまた、江戸下町的、あるいはその中で生活人となった下層旗本に共通のエートスだったように感じる。しかしともかく動乱は動乱で、彼もなんども暗殺の憂き目にあった（全部で二十回ほどだったと回顧している）。しかし剣の気合いが発揮されたのは「てどり」においてだった。素手で、相手をとらえる、あるいは思いのままにする、という熟達の秘術である。

〈今とは違って、昔は世の中は物騒で、坂本も広沢も切られてしまい、おれもしばしば危ういめにあった。けれどもおれは、常に丸腰でもって刺客に対応した。あるとき長刀を二本さしてきたやつがあるので、おれは「お前の刀は抜くと天井につかえるぞ」といってやったら、そのやつはすぐ帰ってしまった事があった。……こういうふうにおれは一度も逃げもしないで、とうとう切られずに済んだ。人間は胆力の修養がどうしても肝心だよ。〉
（『氷川清話』〈丸腰〉、257p）

また『海舟座談』にはこうある。

〈こうやっついて（※巖本と対面するような形でいて）斬りつけられたことなどは、^{たびたび}度々あったが、いつでもこちらは抜いたことはない。始終、^{てどり}手捕にしたよ。だが先生方がその真似をしたら、直きに斬られてしまうよ。〉（『海舟座談』、90p）

竜馬が勝の器量をはかりに行った時、つまらない男なら斬ろうと思っていたという伝説がある。竜馬は信服して、勝の右腕として奔走するようになる。また板垣が蟄居時に彼を斬りにいった武市半平太が、それを板垣に見抜かれ、話し込むうちにかえって肝胆相照らすようになったという。これもおそらく伝説だろうが、そういう話も流布していた。これはわたしは、封建末期特有の〈志士のコミュニケーション〉の型ではないかと思う。そしてそれはおそらく、上で少し検討した〈喧嘩の修行〉と関係している。つまり儀礼的な喧嘩というものはたしかにあつて、子犬のじゃれあいではないが、それはコミュニケーションの一つの型となりうる。斬り合いも〈てどり〉も、もちろん喧嘩よりははるかに危険だが、しかしそこにはまた喧嘩での器量のはかりあいも、裏面にはつねに見え隠れしている。これがつまり、剣による（無剣の）コミュニケーションの一つの型である。そしてそれは勝の場合に典型的に見られる。

勝の剣を通じてのネットワーク形成も、木戸たちの剣道場をハブとする〈志士〉の定型とは異なるものの、やはり時代の中で培われた〈平和主義的剣士〉の能力であった。このルーツもまた、父の小吉と共有する本所深川旗本の器量、度量、平和主義的生活感覚ではないかを感じる。同じことを〈遠山の金さん〉がやると、絵になって庶民は拍手喝采するが、同じことを木戸や高杉が真似たとしても、^{さま}妙に様にならないし、大久保も西郷もそういうことはやる気すら見せなかった。これが一つのヒントではないかと思う。

もう一つの修養は、これもやはり江戸下町を本拠とした、下層旗本に必須の生活の知恵だった。つまり貧乏を受け流す能力、〈武士は食わねど高楊枝〉に通じる、士分特有の〈いき〉である。貧窮に慣れること。さらに生活の浮沈をそのまま受け入れること。これは特に勝のように出世が始まった幕臣には必須の智恵だった。なぜか。節を守るためには、生活の浮沈を受け入れなければ始まらない。これがわたしは、〈名奉行〉のシネ・クワ・ノンではないかを感じる。勝はまず貧困を、そして栄達と左遷によって浮沈を味わったが、それを平静に乗り切る。すでに食客浪人を養っていたので、ひどく困ったには困ったが、節は曲げなかった（『氷川清話』）。

これも一つの型で、江戸期の幕臣でもっとも庶民と触れ合う位置にいるのは、奉行、そしてその下役との与力だが、彼等もまた、浮沈の多い時期があり（たとえば改革期）、そこで主義主張、正論を通して、お役御免や蟄居、場合によっては処罰を受けるグループと、うまく泳いで職にとどまるだけでなく、さらに上をめざす野心家タイプがいた。勝に近い天保時代でいえば、遠山景元ははっきりと節を守るタイプで、しかも民衆厚生、窮民賑恤の感覚があったため、浮沈はかなりあった。しかし節を曲げないので、民衆的な人気も根強い（これが〈金さん〉伝説の始まりとなった）。景元に対抗した取締派の鳥居耀藏（一七九六～一八七三）は、典型的な酷吏であり、讒言家であり、野心家である。民衆は典型的な〈悪役〉として、長く記憶することになる。勝は貧乏に慣れ、また節を大事にする人柄だったので、自然にこの名奉行のタイプへと近づいていったのだと総括できるだろう。もう一つ重要な名奉行の人格的特性があるが、それはすぐこれからまとめて考察する。今は勝の定位造型にもどって、剣とならぶもう一つの要因、〈学〉における自己定位を見ておこう。

勝の〈蘭学〉は、天保の弾圧、あの〈蛮社の獄〉以来の〈蘭学〉であり、つまりは砲術、兵学、軍事が中心である。しかしその過程で、合理主義精神と、〈国家主義〉が涵養され、しっかりとした主義主張へ、つまりひとつの近代的イデオロギーへと造型されていった。それがどうして可能だったのかを考えてみたい。

彼の蘭学は、エクセントリックな幕末の経世家蘭学者、佐久間象山（一八一―～一八五二）の流れを一応汲むものではあった（象山へは妹が嫁いだので、縁者にもなっている）。しかし象山からの影響はかなり限定的で（象山の大言壮語癖を彼はかなり毛嫌いしていた）、勝の基本である行動的合理主義は象山門下のそれではない。象山が蘭学者でありながら、経世家となったことは、ある面で勝の蘭学と〈国家主義〉を先取りしたようにも思えるが、これもまた形式的な重合にすぎない。なぜなら、象山の経世はまず儒学を修得したことからきたもので、それはオーソドックスに江戸儒学の伝統上にある（それも公認の朱子学系統である）。蘭学は砲学、軍事を中心としたオーソドックスな実学だった。その実学において彼はたしかに当時の第一人者（の一人）となるのだが、経世における合理主義、たとえば杉田玄白にはっきりと見られた傾向は、彼には希薄だった（したがってハイブリッドなエクセントリシティが生まれることになる）。朱子学的な〈理〉が彼の経世の中心概念だったようだからである。それはもちろん近代的合理性の対極に位置する〈道徳政治〉のイデオロギーだった（これを素朴に混同する象山論がたえないのは残念であるが）。

勝の場合、この前半部の儒学的経世がほぼ完全に欠如している。そのために実学であるはずの砲術、軍事の内在的合理性が、彼の経世感覚にも浸潤していくのである。そのルーツは、やはり渋田の援助で原書読解の幅が広がったことが一つ、もう一つは、ともかく時代の風潮のようなものが若い海舟を刺激し続けていたからではないかと思う。そして最後は、軍事兵学内に内在する合理精神だろう。これがある意味、もっともわかりやすい受容だったかもしれない。あるいは受容ではなく、刺激だったかもしれないが、ともかく旗本の職能は江戸開闢以来軍事であり、幕臣として将軍の親衛軍を造ることだった。これは家康以来の制度構想であり、たとえいかに形骸化したとはいえ、そこに彼の幕臣としてのルー

ツ、イデオロギーのルーツがあることがわかれば、まさにそこにおいて、最新の軍事を学ぶことの意味をつねに考え続けたことはたしかである。

したがってここにも〈水中花〉の一つを認めてもいいのかもしれない。つまり玄白たちは、〈解剖学〉を通じて、そこに内在するデカルト的な身体機械論、そしてデカルト主義そのものを遡行的に直感し、受容する。その時デカルトを用意した、〈世界と人間の発見〉、ルネサンス期の人文主義的定位の遺産も見え隠れしていたのだった。それが世界誌的関心を生み、やがて玄白の経世献策へと成長する（第二章第四節）。

同じように、軍事兵学の研究翻訳、そして長崎奉行としての近代的軍事教練の実践を通じて、勝は近代的軍事兵学の核心部にある合理精神に触れ、それを食欲に吸収したのではないかと思う。そしてそこにおいて、ある意味玄白と同じような、近代合理精神の全体性を急速に摂取していくことができた。ここでも内在的な自己塑性、兵学、軍事に埋め込まれた合理精神そのものの自己塑性が、勝の世界認識において大きく構造化を果たしたと見ることができる。つまりここにも確実に、デカルト的精神の〈水中花〉は咲き出でたのである。

その場合、鍵となったのは、上で見た儒学的素養の欠如に見られるように、蘭学以外の学的蓄積がなかったことではないかと思う。彼には参禅体験はあったものの、「本を見るのはもともと嫌い」で、つまり士分には常識的な、漢学のしっかりした素養があった形跡がないのである。もちろん手習いはしたし、将軍家で「ご学友」となるための素養ももちろん身につけてはいただろうが、外の維新の志士と比べる場合、藩校（昌平黉）、私塾での漢学面での頭角というのが一つの共通項であるのに、彼の場合はほとんど記録されていない（自身でも「漢文は康熙字典で適当に読み流している」という意味のことを言っている）。

この欠如態は、二つの意味で大きかったのではないかと感じる。まず彼が儒学のドグマ化した修身齐家治国平天下にほとんど接していない、それを自己修養として摂取した形跡がない。もちろんあの『夢酔独言』にも忠孝は型として説かれてはいるが、ああいう「はずにかまえた」言葉を聞いて、それで朱子風の忠孝に励むとすれば、それは奇蹟には違いない。海舟が父から摂取受容したのは、その皮肉、自嘲の背景にある、案外健全で穏やかな下町の生活常識だったはずである。

もう一つの要因は、新しさだと思う。つまり本格的な学問に接したのは、彼の場合漢学でも、もちろん国学でもなく、蘭学、それも高度に専門的だった軍事兵学だった。この新しさ、さらの気持ちで、何も書き込まれていない白紙の頭がそれに新鮮に向き合うということで、それが与える驚き、迫力、体系性への感服は、非常に大きかったのではないかと想像する。福沢諭吉がすでに、維新の志士は「頭が白紙だから、自分の本（『西洋事情』）の理解も摂取も早かった」という意味のことを述べていた（第四章第三節）。それと似たことが、若い勝の頭と心において起こっていたような気がする。それは、彼が軍事、特に海軍の軍事をめぐる、抜群の受容力と理解を示しているからである。その最大の証しは、あの咸臨丸でのアメリカ渡航で、運良く同乗した福沢もまるで自分の手柄のように（この人には時々これがある）喜んでいる。

〈しかしこの航海については、大いに日本のために誇ることもある、というのは、そもそも日本の人が初めて蒸気船なるものを見たのは嘉永六年、航海を学び始めたのは安政二年（※すなわち勝が指揮する長崎の海軍伝習所において）のことで……その業なって、外国に船を乗り出そうということを決したのは安政六年の冬、すなわち目に蒸気船を見てから足かけ七年目、航海術の伝習を始めてから五年目にして、それで万延元年の正月に出港というその時、少しも他人の手を借らずに出掛けて行こうと決断したその勇氣といい伎倆といい、これだけは日本国の名誉として、世界に誇るべき事実だろうと思う。〉（福沢諭吉『福翁自伝』〈日本国人の大胆〉、111p）

福沢は初対面の時からあまり勝とは折り合いが良くなかったようで（それは勝も同じだが）、ここで勝の名前すら出していないが、この「勇氣と伎倆」の中心にいたのは、もちろん伝習所の教頭として竜馬たちを育てた勝以外ではなかった。

その勝は、私塾で蘭学、それも軍事関係の蘭学を教えていたことが、幕府の上層部、とくに開国改革派の目にとまり、長崎奉行に任じられたといういきさつがある。したがって少なくとも実務方面の兵学軍事の受容において、彼は最初から最先端に立ち続けていたことは間違いない。その彼は、和書、漢籍は遠かったようだが、またキャリアが下降して塾居に入った時に、遅れを取りもどそうとして一念発起した。しかしそのやりかたがまことにユニークだった。

〈若い時は、本が嫌いで、手紙でも書きはしなかった。元、剣術遣いの方だからネ。四年ほど押し込められている時に（※はっきりとした塾居は1864年から66年までだが、その前後は不遇であったから、その期間も入れているようである）、隙でしようがないから、読み出したのサ。朝は西洋サ、昼は漢書、夜は日本の雑書で、たいてい読んだよ。漢文は今でも読めないよ。西洋学者だから、字引で読むのサ。四年やった時に、そう思ったよ。もう四年もやれば、よほどの学者になる。本読みになるのは、楽なものだと、そう思ったよ。〉（『海舟座談』90p）

このバランス感覚は、もちろん漢学者のものでも、国学者のものでもない。蘭学者のものでもなく、やはりバランス感覚としかいいようがないだろう。案外父小吉の、学問はほどほどにという、これも下町のセンスだろうと思うが、それが生きているのかもしれない。文武もこりかたまと駄目だと彼は言っている。

〈数巻の書物をよんでも、心得が違ふと、野郎の本箱字引になるから、ここを間違はぬよふにすべし。武芸もそふだ。ぶこつの業を^{まなぶ}学と、支体（※肢体）かたまりて、野郎の刀掛になる故、其の心すべし。〉（『夢酔独言』、10p）

しかし江戸口語の迫力もすごいものだとあらためて思う。「野郎の本箱字引」に、「野郎の刀掛け」、一回でも聞いた子供は、ぜったいにそうなるまいと思うにちがいない。そして海舟もたしかにそうはならなかった。

勝親子の肉声の共振が指し示す方向は、これから詳しく見ていこうと思う。その前に彼の近代国家草創に際しての大きな功績を簡単にまとめておこう。

一つはまずこの咸臨丸渡航に象徴される、海軍操船の「伝習」。それは当初から海軍のみならず、民間の海運も視野に入れたものだった。竜馬の海援隊と彼の関係がそれを象徴している。そしてそこから岩崎弥太郎の海運事業が育っていく。もちろん海軍に関しては、彼は中心的な創設者だった。のちに薩摩の海軍技術がそれを継承していくが、あくまで海軍という近代組織の骨格を造りはじめたのは、彼をもって嚆矢とする。そして一言付言しておけば、彼に見られた近代化の全体性、教育性が、薩摩海軍閥では職能化が進み、それは東郷平八郎、そして山本五十六へと継承されていくものの、根本の合理精神と総合性がどんどん目減りしていった感は否めない。勝の横に海援隊を置くと、海運と海軍の近代化が横並びであることがすぐわかるのに、東郷の時代にはすでにそれは見られない。そして大正期からは、はげしい「予算の分捕り合戦」が長州陸軍閥との間に開始された。これが結局憲政を内部から侵食していく滅びの種の一つとなる。それはすでに非・合理的なのである。この合理主義の全体性も、幕臣勝が持っていた一つの貴重な能力、そしてその漸次の喪失という過程として、確認しなければならないと思う。

第二は戊辰戦争のハイライト、あの江戸城引き渡しである。この過程そのものは、すでに研究、創作、ドラマを通じて、われわれの常識と化して久しい。その常識に付け加えるべきものは、わたしもなにも持ちあわせないので、そのままがいいと思う。ただしアングルを変えて、彼がこの時やろうとしたことを、〈名奉行〉の伝統からとらえなおしてみたい。その作業はこれからすぐ行う。

第三は、目立たないが、これがある意味、近代国家の確立にとっては一番大きな功績だったとわたしは感じる。それは、旧幕臣の静岡組を保護し、大きな騒ぎを起こさなかったことである。この意味は莫大に大きい。つまり〈帰農〉せずに〈福沢のように〉、また〈新政府〉に加担することもせずに〈出仕はごく形式的にとどまった〉、独力でそれを行った。慶喜と共にひとまず静岡の〈徳川氏の本拠〉に戻った士族が全部で八万人いた。そのうち臨戦態勢にある〈軍〉が、当初はまだ八千人もいた。この幕臣士族の生活を安定させるために、彼は明治にはいつて奔走を続けたことが、『氷川清和』でも、『海舟座談』でも通奏低音のように響き続ける。たとえば次のような総括。

〈三十年来（※維新以来）徳川一門を固めて置いた。皆なオレの言う事を聞くから、マサカの時には国家の御用をする事の出来るようにしてある。〉（『海舟座談』204p）

こう胸を張れるまでには、大変な苦勞があったことが察せられる。それは一つには前將軍慶喜に、およそ〈経世〉の才能がまったくなかったからだった。この人はほんとうに期待外れの権化のような人だった。かつて名君のほまれを唱われた彼だが、その為政の能力はまったく悲惨だった。その悲惨さをつぶさに知る勝は、一方では慶喜の無意味なパフォーマンスも止めねばならない。止められない場合は、火消しをしなければならない。まず内乱の可能性を嗅ぎつけて暗躍するロッシュたちが、慶喜にことあるごとに勧めたフランスの外債を、必死で止めた。これも勝が世界情勢に通じていたことを示す良識である。

〈フランスから金を借りるという事では、己は一生懸命になって、とうとう防いでしまった。もしあれが出来ておろうものなら、国家に対して何と申訳があるエ。〉(『海舟座談』、170p)

海軍創設にかんしては、彼も財政面でおおいに苦勞し、まとまった金は欲しくて仕方なかった。しかし彼の良識がそれを止めさせた。その際、決め手となったのは、彼の近代的公人意識において、国家と幕府がはっきりと分離されていたことだった。

しかしさらに「殿様の御乱行」は続く。大政奉還をすでに終えた慶喜は、まだ外交大権を握っているつもりで、各国の大使に「外交のことは、依然此方にて取り扱う」という挨拶状を送る。これが明治になってひょんなことから明るみに出たらしい。大使公使が疑問に思って新政府に打診したのかもしれない。当然ながら、大久保たちはカンカンになった。すぐ勝を呼び出す。これはある意味、〈叛意〉ととられても仕方がないほどの愚行だったが、勝は「ああこのことですか、だからすぐに朝廷に恭順を誓ったのです」と、前後関係を無視して、ついでのように弁明した(つまり大政奉還後の愚行を、その前だったととぼけた)。臨席した大久保がピンときたらしく、「いやそうならそれでいいのです」と答えた(同上、172p f)。

これもある意味、江戸城明け渡しの際の西郷と勝の、「ええ、それでいいです」にあたる、大きな事件だったかもしれない。つまり大きな事件が起こらずに済んだ、ということだが。しかしおかげで朝廷では、勝はなにをいしてかすかわからない男だという疑心暗鬼になり、ひどく憎まれたと勝は付け加える。まだ国学派、廃仏毀釈派が跳梁していた朝廷では、幕臣はいまだに「逆賊視」されていたことが、その背景にある。つまり、祭政一致派、神祇派においては、もちろん朝廷と「国家」は分離していない、それが勝の「国家主義」との本質的な差異だった。

ともかく、静岡に転居させられた幕臣「八万騎」(おもしろいことに家康の関東入りの際の軍勢が、やはり八万前後だと伝えられている)をとりまとめ、生活破綻を防いだことは、明治政府にたいして勝が行った最大の功績ではないかとわたしは思う。つまり西南戦争と比較した場合、私学校の若者四千人前後と、幕末の軍事プロと含む八万人では、規模がまったく異なるからである。もし士族の反乱が静岡の幕臣に飛び火していれば、明治は再び戊辰戦争以上の内乱に見舞われたことは確実であり、それを抑えたのはひとえに勝が彼等の生活を護ったからだと思う。歴史の裏面だが、こういうのを本当の「縁の下の力持ち」というのだろう。そしてその際に発揮された勝の才能こそ、もっとも現実的な次元での「経世」の才能だった。

それは儒学的な机上の空論ではない。現実の生活のやりくりであり、それは行き倒れの視覚障害者、男谷検校が大名貸しをするまでの実力を備えていった、その過程で発揮された才能とそれほど遠くないものでもあった。洋学で学んだ合理主義と江戸期の名奉行の合体したような才能は、この「経世」を統括する財政能力として発揮される。明治の財政家としては衆目認めるところ、大隈、あるいは松方の名前があがるだろうが、勝の財政学は、より生活の困窮に近いぎりぎりのところでの工夫であったから、ある意味はるかに困難で

あり、また実際知を必要とするものであったと思う。この歴史的評価があまりに遅れている部分が、将来の勝海舟伝、そして研究の課題でなければならないと確信する。

この幕臣の生活扶助こそ、勝の公人としての出自、系譜を明確に告げるものでもある。それはつまり、「下情に明るい名奉行」の系譜である。そしてそれは、たとえば江戸城明け渡しの際に彼がとった行動形態にも明確にあらわれている。そして結論的に言えば、それこそが、一方では幕藩体制的抑圧の大きな安全弁であった緩和機構であり、それをまったく失ったところに、藩閥体制の弊害、強権的官僚の跳梁という弊害が生まれてくるのである。明治はどうしてこの緩和機構を失ったのか、その問いとともに、勝における江戸の公人の成熟度を観察してみよう。

『夢酔独言』を見ると、勝家のような下層旗本にとって、役職がどのくらい遠いものであり、また庶民の生活がいかに近かったかがよくわかる。もし上昇志向が強すぎる場合には、かつて徂徠が田舎に十三年蟄居しても、庶民との交流を一切行わなかったようなこともおのずから生じる。小吉は正反対だった。庶民として生活するだけでなく、なお下情に通じようとして、すでに見たように、農事を行うべきだと勧めたことによくその精神があらわれている。勝は街を歩くことが好きだったようだが、それは長崎奉行時代に身につけたもので、もともとは「下情を知る」手段だったようなのである。

〈おれが長崎にいたころに、教師から（※おそらくオランダ人教師）教えられたことがある。それは「時間さえあれば、市中を散歩して、何事となく見覚えておけ。いつかは必ず用になる。兵学をする人はもちろん、政治家にも、これは大切なことだ」と、こう教えられたのだ。〉（『氷川清話』、同上、248p）

そこで勝は訓練の合間に、必ず長崎の市中をぶらつくようにした。ステッキの先に磁石をつけてそれで方角をとって歩くうちに、街並みの大体を把握できた。この時から癖になって、彼は行った先で町を歩くようになる。

〈その後、どこへ行っても、暇さえあれば独りでぶらついた。それゆえ、東京の市中でもたいてい知らない所はない。日本橋、京橋の目抜き所、芝や下谷^{したや}の貧民窟、本所、深川の場末まで、ちゃんと知っている。そしてこれが維新前後に非常にためになったのだ。〉（同上）

明治に入ると、特に下層社会、いわゆる「裏店社会」の実情に関心を持つ。それが社会問題の発生源だと知っているからである。

〈いつかおれは、紀州侯のお屋敷へ上った帰り途に、裏店社会へ立ち寄って、不景気の実情を聞いたが、このさき四、五日の生活が続こうかと心配しているものが諸方にあったよ。ひっきょう社会問題というものは、おもにこの辺から起こるのだから、為政家は、始終裏店社会に注意していなければならないよ。〉（『氷川清話』、同上、256p）

下情を知るとということが現実に役立ったのは、江戸城開城前後の治安に関してだった。勝は前もっての混乱を予測して、その混乱を一番起こしそうな集団、裏社会の親分たちと話をつけておいたのである。

〈官軍が江戸城に押し寄せて来たころには、おれも大いに考えるところがあって、いわゆるならずもの^の糾合にとりかかった。それは、ずいぶん骨が折れたよ。毎日役所からさがると、すぐに四つ手駕籠（※竹で組んだ粗末な駕籠）に乗って、あの仲間で親分といわれるやつどもを尋ねてまわったが、骨が折れるとはいうものの、なかなかおもしろかったよ。

「貴様らの顔をみこんで頼みこむことがある。しかし貴様らは金の力やお上の威光で動く人ではないから、この勝が自分でわざわざやってきた」と一言言うと、「へえ、わかりました。この顔がご入用なら、いつでもご用^{いりよう}にたてます」というふうで、その胸のさばけているところなどは、実に感心^のものだ。

官軍が江戸へは行って、しばらく無政府の有様であったときにも、火つけや盗賊が割り合いに少なかったのは、おれがあらかじめこんな仲間のやつを取り入れておいたからだよ。〉（『氷川清話』同上、185p）

駕籠でわざわざ訪問することですら尋常ではないのに、それも粗末な駕籠で行う。こういう細かな配慮ができることが、いかにも下町の人情を知り尽くした下層旗本ならではのあり、それはそのまま江戸の名奉行の系譜へと連続していく。

ここでしかし、この下情調査とすぐ隣り合わせになっている、封建的、また専制的な一つの伝統と、この勝の行動型との混同をしないように注意しなければならない。それは君主大官の「微行」（おしのび）の隠れた伝統である。これはたとえば、すでに秦の始皇帝が好んだことが『史記』に記されているし、日本では家光が「暴れん坊」のころに、やはりお忍びでの城下徘徊を好んだことが伝えられている。これはもう一つの専制的伝統、「密偵」と結合することがよくあった。たとえば福沢諭吉は、専制的伝統に鋭敏な人らしく、この結合を指摘し、批判している。

〈また、古史に国君微行して民間を廻り、童謡を聞てこれに感ずるの談あり。何ぞそれ迂遠なるや。こは往古の事にて証するに足らざれども、今日にありて正しくこれに類する者あり。即ちその者とは独裁の政府に用る所の間諜、これなり。政府暴政を行うて民間に不服の者あらんことを恐れ、小人を遣て世間の事情を探索せしめ、その言を聞て政を処置せんと欲するものあり。この小人を名けて間諜という。〉（福沢諭吉『文明論之概略』、112p）

明治政府は特に民権運動との対抗において、密偵、間諜、探偵を多用した。これが治安警察法の覆面偽装警官、刑事へと連続していくわけであり、最後に特高とスパイが登場する。それはそのまま一つの専制の顕示的な伝統となっている。そしてそれはまた、江戸期の密偵制度の後裔でもあった。この場合、内務省にあたる目付、大目付はむしろ閑職で、

現場の奉行の役割が非常に大きかったことに、江戸的密偵制度の特色がある。たとえば、幕末のKGBボスとも言ふべき鳥居耀蔵は、密偵を使いこなした代表格であり、彼と対抗した民衆派の遠山景元は、体よく目付に栄転させられ、することがなくて（やろうとしなくて）暇をもてあましている。

前近代における君主微行が、すべて密偵的なスパイであったわけではない。しかしそれはお忍びであり、そしてある種の、言葉は悪いが、〈覗き〉であったことはたしかである。それとこの奉行の下情探索はまったく異なる。しかしまた同じ封建的集権の中で培われた〈制度の智慧〉であったことも間違いない。つまりやはり両者は〈民を寄らしめる〉機構としては、となりあっているとも言える。しかしまたそう言った上で、これが封建下での民衆にとって、大きな安全弁、緩衝材になっていたことも確認しておかねばならない。つまり制度の安全弁であるからといって、それが「制度延命のための反動的伝統であった」などとするのは、まったく現実の歴史状況、そこでの制度と民衆の関係の実態を見ていない観念論であり、愚論であると思う（こういう愚論は、歴史学がいまだに陥りやすい陥穽である）。

この方向での類推を続けるならば、わたしは特に明治官僚制において、この緩衝材的な智慧、制度と民衆との双方にとっての安全弁の構築がほとんど欠如していたことが、近代国家としての日本全体にわたる、大きな大きな瑕疵ではないかと思う。

それはつまり、根強い官尊民卑の裏面でもあった。その根底に、日本人の旧態依然たる封建的心性を置くのは、これもしばしば行われてきたが、学的探求の放棄であり、またわれわれが序論で自己誓約したところの、〈理法の法廷〉の休止であると思う。つまり上で言ったように、勝の聞き書きをめぐる第一のブームが、これから近代的軋轢が本格化していく日清と日露の間の時期に起きたことは、民衆自身、国民自身、明治的制度に根本的に欠如しているもの、その一つに気がつきはじめた証拠ではないかと思うからである。つまり勝のように、遠山景元のように、長谷川平蔵のように、〈下情に通じた〉、人情ある名奉行、つまり名官僚の、明治的官僚制度における欠落を痛感しはじめたからではないかと思う。

その欠落の原点は容易に確認できる。それは雄藩の改革の担い手が「奉行」タイプではなかったことに端的に顕れている。彼らはつまり、やがて維新の志士へと変容する、あの下級武士たちだが、その実務能力は能吏タイプであり、ノーマンが正確に位置づけたように、絶対主義的官僚の先駆形態である。維新が完了し、明治国家の草創にあたって、彼らを大久保が中心になって近代官僚へと再組織する際、その要となった能力も実務能力であり、「下情を知る」能力ではなかった。その合理主義の貫徹はつねに上意下達であって、「下情」を汲み取る途がどこにも設定されていない。それは元々雄藩の能吏たちの頭に藩政しかなく、その藩政のどこにも、民衆、下情の実態が反映されていなかったからである。

もっとも民衆に近づいたのは、松陰の〈草莽〉の理念であったが、それは抽象的な理念にとどまり、やはり〈下情〉の具体性には欠けていた。これが江戸的名奉行と、明治的官僚の大きな違いであり、それはそのまま日本的近代の閉塞環境を造り続ける大きな要因となっている。そしてこの欠落をおそらく知り、両者を媒介しうる位置にあったのが、合理的開明官僚でありながら、なおかつ人情の、下情の、実体的政経にとっての重要性を知悉

していた勝ではなかったかと思う。幕臣が藩閥政府から疎外されていったとき、こうした〈人情を知る官吏〉の伝統が消えていくことを、彼も如実に感じていたに違いない。

歴史はその中核において、呵責無き弁証法的選択を示すことがまある。この明治における、下情と官僚、政府の遮断は、日本が国家として統一されるために不可欠な先駆者だった、雄藩の開明官僚の対制度的自己定位からまさに生じていることがわかる。対して天保の改革期に、旧態依然たる農本と儉約、そして徂徠的な〈人返し〉しか採択できなかった幕府の命運ははっきりと尽きた。しかしまたその旧法を緩和する側にいた、人情ある、下情に通じた遠山景元のような名吏、封建的名吏が、明治以降も、大衆の心象の中では「自分たちのことを理解してくれたお役人」として生き延びていくことになる。明治から大正、昭和に至るまで、近代的官僚制の中で、どれだけそうした共感を民衆に呼び覚ました「お役人」がいたか、少し立ち止まって問うてみるならば、そのあまりの少なさに寂寥の念をおぼえるのは、きっとわたしだけではないと思う。

もちろん封建制内部にも、入れ子になった抑圧と人情の弁証法は見え隠れしていた。遠山景元のすぐ横には、あの鳥居耀蔵、抑圧の「まむし」がいて、邪気のコモった目ですべての開化を阻止しようとしていた。しかしまた、江川英龍もいた。渡辺崋山もいた。崋山は、小藩の為政者だが、しかし確実に名臣、名君の器である。そうした官吏官僚、役人と家老、藩主のすべてをならせば、やはり平均的停滞の二百五十年が見えてくるのだろう。しかしまたその中に生きた民衆にとっては、平均が問題ではなく、名奉行がいて、悪吏、酷吏がいる、その両極と自分との実際の距離がつねに問題であった。

つまり勝が示してくれたのは、江戸公人としての「下情を知る」定位型の明治的残存であり、それはまさに日本民衆の心の琴線に触れる、そういう定位遺産の最後の姿であったと思う。

そう確認して、この懐かしい、活気にあふれる、「天保老人」の定位概観を終わることにしよう。

(近代本論第二十回テキスト終わり)